都繪馬鑑

四

洋学文庫
文庫8
D 256
4

都繪馬鑑四之巻目録

目録

大佛殿石曳之圖　清和院　筆者不知　○竪四間中横四尺

五郎丸抱止曽我時宗圖　北野　山本理兵衛画　○竪五尺横五尺七寸

卯籠　上御霊　狩木左衛門作

馬之圖　清水寺　狩野縫殿介画　○竪一間横二間

異國人歌舞之圖　清水寺　筆者不知　○竪四尺五寸横五尺

文庫
D 256
4

更登書
我書仰

39- 7987

010190614170

附録

前編扁額軌範に寫出る外の絵馬数品画を専らと
して其傳の闕く今是を補ふて附録とし かつ古代の人物
抄出して好古家の観に備ふ 看君子初編を需るゝ
合看給ふべし

都繪馬鑑四之巻

○大佛殿石曳之圖　七条松原通一条の北清和院本堂の

掲ぐ画人知れず

大佛殿は洛東東山の麓にあり 方廣寺と号す

○太閤記大佛殿の条に云 四方石垣の事 殊に大きなる石を

弘法裏へ及ではいかにも小なる石は盗み取る故も安からずして重

など取て重く築立し 勝て蒲生飛騨守引し石は二間に四方ある

勢ひ強く引付たりし体ぞ今もすゞしくはなし 本院の表紙五星の

まなこよりしり見る目見る画乃者 棹押もならぬ程 白川の奥より大

至る年及七月とぞ

○豊臣家譜に云　林道春作　慶長年秀吉謂く東山に於て

仏を建んと極書院玄以法印 浅野 増田長束に命じて曰

寶文元年
外の文字剥ゑてみくず
山物道比丘尼とみくず
人まくてもくず

を歴て其功成る。是歳を五年わかつて其功を終へべし。海内具でんを
某所に結ぶ。結ぶ所ならず會し流云先師宗貞の子孫師宗貞茅宗明及
びユ人を召して文土佐九州信長本晋紀元然世に監使二十人ユ所ユ人を
擇び群國に遣して材木を伐り山四國九國の人を所の山中に入て
本代斬芟紀本系浪乃羽本刈べし。伊勢尾張美濃乃人を岐阻の山に
本入材木を伐裁め樊長素名に列大坂に来り其本接べし義淳十二
乃人を文伝の指紀乃値。築山宗乃修理を勧むべし。仮を乎宗こと伝
相。元代定色。元仮本要る者二十一四乃て之を指。其一を伝紀を
考る其一を頃を考る其一を築山を考る伝係を刈ん
其成を晩し故本像を刈し深解を刈し深を五彩を伝し鋳を
負宗印本命ド巨仏を造しむ。元相直盛糟屋内張高二郎を
寺命後ち多川皇馬首同宗貞茅郎を副堂乃を一十文仏の

高さ十六丈是旧式なり。今敢て遠ず深擢を泉堺今井宗久を
監を。池田備中ち河完把奉る。上田を水ぶ副ち茅山本食奥ち上
人を伝を元号ら也裏山収んで即庇廬を仏光寺の辺本掃りて
是を監に仏殿附く成て深解を深る。築山代東宗本接縄を巨
柱本繋車代伝を元運ぶ。其巨柱ちやふ支も元鉄を巨代る
代而も今百人の力代伝を元を運搬を。其工巧妖ぬのごし。四方れ値を
魅石代伝に其經費の用本訳る者毎日五千人を以上

○慶長元年大地震し大仏乃大像を破損
○同七年同伝乃係代溝。浄首を法時大仏の相乃内を焼失
○同十三年再建ち
○寛文二年同係を改て本像ちを
○大仏殿や戦て大阪扶桑第一の美観ち
雷大殿の東角北の方二ち月の出本ふ焼人まち
雷大殿の東角北の方二ち月の出本ふ焼人まち
雷大殿の東れ方ち四年目の狂の神形ち

力をそへし事は水流れし出は隨ぐことなし二十四間縁の末まで及ぼしけんとぞ
及ぶべくや一旦を清まりしかくしが此大柱の合目乃道より内を通し
たやすくくぎりして半内より火燃出でびたりとは隨ぐんと力をそへる
し樋火盛りし堂内まで上下の屋根一面乃西東四方に散乱し内外
の樋太き屋根を焼めぐる尾の掛に隨ひる音は百千の雷のごとく堂内
一面の火となりしかバ隨身に御つきし居らに行を振り眉をおさへて頓くのこ
火守に大縁よりつけり此縁より出る魚の金眉火のしもに縁を焼る事あり
行きを流しなりりに火をと益焼しして二王門及び四面廻廊にてりつ金剛
力士乃像共に森ぶ焼失す南の方れ廻廊より東門及び四方の廻廊を
ぐく焼失し門口末の升斗より火移りてかの大殿の火まで流れしに以てる
もろく其焼ふ済て火を南方の廻廊を北の中方の廻廊は南西方の廻
廊と東南の方の廻廊と西の方に焼倒れて内へ来きたることなりしとく

○五郎丸抱止曽我時宗之圖

寛永二十一年　山本理兵衛画

北野社繪馬堂ニ掲く

伊豆國の住人伊東祐高といふ者あり女子二人をもてり姉の子は伊東二郎祐親と云妹の子を伊東祐継といふ祐親は姉の子なれど幼少なるにより嫡の子祐継と定ふて家を継しむ後姉の子伊東祐親が家を継ざるを恨む。

病に祐継は呪咀ん。祐継既に死んとする時我子金石丸今九歳なれば祐親に采地及び家系を屬して金石丸が補をしてより祐親を後見とす金石丸長ずるといへども父の跡を護ん家は祐親押領せしかバ金石丸工藤左衛門尉祐經と名を更め叔父が所行を怙りて密に祐親を狙ふ安元元年十月祐親伊豆の奥野に狩する時工藤が家士近江小藤太八幡三郎赤沢山に待て祐親を狙射る矢あたりて祐親が子河津三郎祐泰を射殺す祐親怒て敵を捜せど近江八幡を早く逐電して捕れ河津三郎が妻然るに又てたまふらんと云を又祐親が妻くに曽我太郎祐信に嫁せしむ

○伊東祐親を治承四年源兵衛佐頼朝に背くによりて罪にしたる時大庭三郎景親とともに頼朝を石橋山にせめんと立て伊東が子又べしとて三浦義澄が家に祐親が女なりしが義澄同じの縁をとなすよう。三浦が庫の女の姪となせるを表ん。伊東と聞て祐親おのれをそなく自殺ん

是より河津三郎が二人の子なり兄は一萬弟を箱王といふ又弟る時兄は五

嚴牙はこれ嚴なり。母は修善寺に居られ、源氏は曾我十郎
祐成と号し、時に十八歳、箱王を五郎時宗と号し、十六歳、幼少なれども
勢威猛なり。遠江頼朝も是を召し、建久四年五月、新田郷に於て
野狩し給ふ。諸士皆扈従して、俄に武蔵権守義兼、十郎を召
乃至、時宗、工藤左衛門尉祐経も、同伴し給ふ。曾我兄弟、父の仇
討ん事、此時なるべしとて、弓矢を用意して、奔走して、五月廿八日、十郎祐成、工藤
と見過ぎて、立寄仮屋を出て、十郎を招く。祐成、内へ入て、兄弟、祐経を右に
ぼ、其の大盃内と、盃を酌して酒あるして、有るうち、十郎を見て、
き、祐経、父の敵、と云ふ、是、今、人の讒言なり。所詮、討ん
ば、必定、伊豆、駿河の人、役野五郎と相撲の事、有りしを、祐親、
辞するは、あるべき、祐の宿、事、対面、
い、伊東、伊豆、今、うい、墓、祝、野、狩、御、墨、有、べ、何、を、恨、
下ノ四

ぶ方へ、立、事、ど、如、鬼、祐、経、と、対、面、し、頃、人、来、今、生、く、い、ひ、ま、ず、荒
言、し、ば、十郎、を、恨、工、藤、が、讒、言、祐、経、一、刀、に、よ、ら、ず、兄、弟、一、所、に、仇、を
殺、ん、と、約、し、ぬ、を、左、雄、り、て、五郎、が、恨、人、も、不、仕、り、と、何、気、無、く、伸、び、立、ち、
其、後、十郎、を、村千鳥の、直垂、黒、鞘、八、本、武、佩、五郎、を、蝶、書、る、巻、
源氏、重代の、反切、と、云、ふ、刀、を、佩、陣屋、へ、と、歩、び、通、り、祐経、が、陣屋、に、立、
れ、を、引、と、見、様、に、上、へ、く、見、る、に、存、外、射、祐、経、を、る、武、の、お、ば、し、大、
内、に、居、ら、ず、と、雖、も、兄、弟、大、に、歓、び、祐、経、を、招、き、
祐、経、を、強、く、持、ち、ぶ、り、折、れ、て、い、ま、し、ば、し、
枕元、の、太刀、武、取、て、十郎、を、祐、経、の、弓、の、肩、に、馬、の、猪、の、
まで、通、り、て、突、い、五郎、も、腰、の、上、を、切、通、し、傷、に、
陣、屋、に、奴、原、見、知、る、ぞ、後、日、小、手、ふ、と、云、ぶ、ば、か、も、取、て、高、言、て
近、く、武、十郎、を、急、て、切、殺、し、ぬ、通、ば、通、ま、ば、に、行、き、て、言、武、吐、く、ぞ、和、

寛永二十一年霜月吉日　山本理兵衛筆

奉掛　御寶前
諸願成就之所
願主速水六兵衛敬白

宿坊
能喜

[illegible]を通ぬして大音に伊豆國住人伊藤二郎祐親が孫[illegible]
十郎祐成・同五郎時宗親の僕[illegible]親祐を射取らんと呼はり
陣を張の外[illegible]一騎丸武藤の高馬介・二番小袁甲三郎・三番郎
三郎・四番小原小次郎・五番に黒澤五六・六番木村太郎・七番に工藤八郎
各切出る武勇を引退く。八番小海波小太郎・五郎と戦ふ倒る。九番目
宇田小四郎・十番小田井八郎を戦ひて射る。安西七郎も射とめぬ。その十騎の
内其郎独方出ふく射ず者共三百八十騎人馬に目をかけ働く。
されども其後金石を徹し戦ひ敵と十郎を新田十郎太綱と戦ふて射死
ぬ。五郎を城反次を遣ひ河陣屋の幕に中に入れ。五郎五郎と力の強
浮衣一枚着て幕の根に伏。五郎。女ぞく乱打捨ひを五郎丸を見
て時宗を深を手に抱き。抱て押へんとすれども強力の時宗ゆゑ。
女とかかりよとなく。引ぶつ入んとする処。相撲方司五郎丸・御厨乃

小平二郎四五人の力者強者ども五郎を抱ふ。五郎北を接け。時宗倒れ
二三人を蹴倒し。大庭の蹴出をとせ[illegible]。[illegible]
如を打[illegible]五郎を生捕。[illegible]時[illegible]
若して阿弥[illegible]見る者皆驚歎[illegible]
[illegible]。生人の武勇[illegible]。又祐親[illegible]
[illegible]。十郎祐成時[illegible]二[illegible]。五郎時[illegible]十[illegible]
○今お[illegible]國に住[illegible]時宗の[illegible]
○五郎丸を[illegible]京師の者幼[illegible]
紂[illegible]東國[illegible]。一東[illegible]
[illegible]羽卿[illegible]馬宗の[illegible]者[illegible]十五人の力[illegible]

繋馬之圖　清水寺堂東之方外陣中ノ

寛永十四年　狩野縫殿介画

奉願御寶前
宥坊
園養院

寶永拾四年五月吉日
狩野綾殿助

○異國人歌舞之圖　清水　義應四年　亜名弓紀

[illegible]国人[illegible]東京交趾の人[illegible]東京[illegible]土[illegible]て西南の隅[illegible]国[illegible]日本の海[illegible]東京交趾の[illegible]近来東京交趾と二国[illegible]両国の界にキヤン[illegible]山の肉桂[illegible]人[illegible]の[illegible]人の[illegible]日本の[illegible]山[illegible]肉桂[illegible]人[illegible]の[illegible]人の[illegible]日本の[illegible]月代と剃[illegible]男女[illegible]土[illegible]の[illegible]郷[illegible]

下ノ八

異[illegible]。箸を[illegible]て[illegible]国[illegible]文字を[illegible]箸を用ひ[illegible]て[illegible]

○交趾を東京[illegible]今[illegible]安南国[illegible]漢土[illegible]の文字を用ひ[illegible]日本[illegible]千四百里[illegible]

○印籠　上御昊　宝暦十年　蒔絵師　絵本庄左衛門の作

市の統を幸印刷肉を入る具なり。今義氏公、直義を入る器を義氏と云。直義
は一名ひる丸。腰に帯て遠中に持る物の用に成。是を盛び井義氏ざるを極て幸を綱
目、橘家の其紋丹義と作る。義氏と作る。極同紋を幸利の紋なり。

○齋藤實盛篠原合戰之圖

齋藤長井別當実盛を田村將軍の後胤斎藤直実初の名は河原太
郎左衛門尉房後称郎左衛門尉実盛と号し武蔵の人なり。小松内府
重盛が家人なり。長井郷に住を元は実利と云。武蔵武蔵別當と称て武蔵武蔵別當と
ぞ人なり。

○一説に斎藤実盛は初の名は河原太郎左衛門尉房後称郎左衛門尉実盛と号し武蔵の人なり。旧地今越前国

○寿永二年木曽義仲と伯父平家の大將小松内府維盛卿馬頭
弘盛三河守知度越前守と伯父通盛三河守知度十万騎を率し加賀越中の境
倶梨迦羅山に發向し義仲と鳴浪の志保山の戰に打負て平家滅亡
て残る者数知れず加賀国に入り退く義仲追て篠原に戦ひ平家又敗ひ

寶永二乙酉年
五月吉日　宿坊　長吏
宝光院

前川有右衛門
願主大坂住
京屋

加州之大八幡宮宝庫
奇及宝盛鼻甲大袖膳當
赤地錦直垂之圖　○赤地錦直垂切地之

地赤色ニ糸金入

○五枚冑威啄木

錦草　色草　鳩銀　紅糸　ぎれし金

○鎧大袖

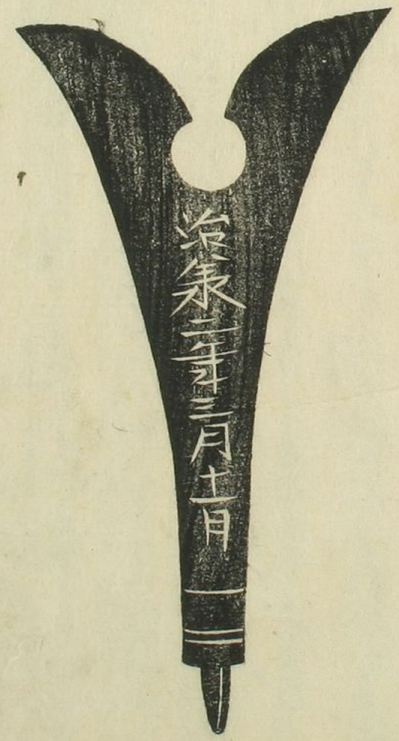
色草　金威金　菊唐艸　啄木　紅糸

○膳當

内股方　後方　鉄打延ニ　絲縅し後ニ　脇方

実盛が生物奉納の時義仲添ふ矢根裏ニ書ニ字あり

多田八幡宮
矢根ハ村上
加賀先祖ゆ
其ゆゑ源氏
のゆしよりく村ゆ
名氏此の方
方ゆ多田の社
あり



夏て引退く時ハ実盛七十三ニ成一騎ニ成ても今を信濃国の住人手塚太郎光盛
弟ニ成ても組んとて手塚太郎等　盛長　盛義　此ハ平家物語ニ
対せんと云実盛ハ組て実盛ハ渠が疲り押付の板を踏て敵ハ
を捨んとすると手塚弟ニ成て実盛ハ馬より下り腹ニ
さて手塚太郎ハ弟ニ成て首を斬て手塚甚五郎ハ

して首取て木曽殿のおまへに持来り此曲者の首を取て候名のれども
も名のらず錦の直垂を着たれば大将かと思へばつゞく者もなく面白の坂東声
人とも見えねども鬢髭黒くして壮士に等し木曽殿は樋口次郎兼光を呼で
見せしむるに兼光実盛が首を一目見て鬢髭の黒きは染られ候年老
白髪なりとて口惜きのみならず人に侮らるゝ戦場にても若き者と先を争ん
も長げなく老て陣に向ん時は鬢髪を墨に染て戦んとのみ申せしが果
して左もあらんとて首を洗ひて見れば果して墨悪く落て白髪となる
是より実盛が錦の直垂を着たるは越前国へ向の時内大臣宗盛に乞て
故郷へは錦を着て帰ると云本文あり実盛年老て生国に赴ん身は乃
直垂を乞打の征矢を免し給んと實に御恩よりと尊さに着たりける
木曽殿も哀れとも七日斗父にてありし人のこととて涙の袖を絞りぬ実盛が
着たる兜は源氏の先祖積善則ち八幡殿に後三年の戦に武功ありし

又源代金丸と云矢戒を射し時着られし兜なれば八幡殿の兜をうつされし
旧縁浅からずとて篠原の八幡宮に納め錦の袖を寄附して源氏の開運を祈る
○今加州江沼郡篠原の八幡社に蔵むる処の木曽が実盛寄附せる
義朝より給ふの兜とあるはこれを正とせんか
木曽が実盛を七日の父とせしことは義仲が父帯刀先生義賢を悪源
太義平討し時義仲はいまだ二歳にて知らぬ身なりしを斎藤別当実盛
日頃の情に匿し信濃の木曽へ送りて危きを救ひ助けし恩義を忘れずして斯
云へるなり　以上平家物語源平盛衰記諸録抜要
○織一石様に云武人云多田満仲が子孫と称し常にありけり伊勢の
が後たる者の業に大の字を紋として加賀の国大聖寺の城下に住居
集つて云老ありしが幸なりし老を見て実盛が後なりとて其家の系を
ろる若者年二十にあまりしは鬢髭を白くし色を黒くして生れつき枝
髪二枚有りし其子十四才ばかりなりし顔の白き其人の家の紋に実盛の二字を自
御縁に実盛が錦の直垂の袖を今に寄附せり
実盛が首洗ひの池と云ふ江沼郡篠原に八幡あり
○加賀国江沼郡篠原に実盛首洗の池あり其上に実盛像の木像あり

○盛光と組打の場なりしが此地にて實盛が様ありしとく
武師に忠信は二君に事へず貞女は二夫に更へずと王蠋が言へるを打ちも
専らに守りて老いたる大切の仇を討たれしは幸ひに従ふ事あり又
ふさびて髪を黒く染め武士の戦場にて迄ましきも名をこそ惜しめ
なりよくいはん武勇を励まし弁へしてこそ高名を古への佳名を流さ
これらは武士のみならず深くたてる武士の二君に事ふ輩婦人の
いふに浮かぶ海もなくなまじひに深く恩ありし實盛を名もなき勇士たる
が源平の二君につかへ二十年来平家の恩顧を忘れず忠を盡さんとすれば
源家木曾義仲の父帯刀先生義賢が討たれし時木曾の幼君を
抱き送りし恩あり實盛が幼少の時より
言ひ知らぬ實盛が
おのづから忠を
義仲の幼き後の木曾の代を
思ひて二十餘年
来たる事あり
つひに討たれ
が勇の誉を

○今加州 郡多太八幡宮の宝庫に實盛が戦死の時着たる兜甲の
大将當錦の直垂義仲が矢根を籠むる義仲が願状あり文曰

夫以八幡大菩薩者源家宗廟之洪基。国土擁護之靈神也。
本地内證之月光。輝乎十萬億土之天。和光同塵之焔。然乎
五千餘座之上。觸縁分化。如天無雨露。下擁榮枯。焉我祖陸
奥守義家。請於神力。輙破大軍。得利不可勝計也。今年義仲
戮戦於越中倶梨伽羅。同夏五月行軍加賀国。茲利仁将軍
之末葉實盛乃越前国之賢君子也。文忠武威炫輝于一世。先
是義朝贈以菊甲。褒美之。當此時。義朝守国日浅。賊徒蜂起。
實盛輙載受甲。殺精鋭之兵七十餘人。以報恩。自斯厥後。不
幸降平家。蓋有年矣。今日與某甲拒戰于篠原濱。智振孫呉
之謀。伏尸數百。勲功譽名殆無比類。然而勝敗異常。享壽六
十餘歳。卒隕其命。時壽永二年夏五月二十一日也。嗟乎苦哉
某甲與公執父子之約。僅七日周極悲其為。誰哉乃為公菩

提及義仲祈禱所被甲錦直垂并某甲表指矢納于能美郡
多太神恭頻年以来平相国混乱四海荼毒萬民故王業一
日不寧仰願加我于神力上為一人下萬姓以平家族非是
義仲為身謀榮耒生弓馬之家五常不奎為住帷称冥慮
而作源家之天依之就多太八幡宮蝶屋庄十三町永代合
寄進之者也仍漆状敬白　　寿永二載五月二十一日

源義仲

多太社之神領蝶屋庄十三町之處永代可守之者也

宰宮司殿　　樋口次郎兼光兼之

○一流ハ法皇の一院剃髪まします盛が牌を安徳牌なり撑指撑指の四字あり何と云ふ事
と知れず三年既前傾城の封内と云ふ事なり其頃は小牌なり勤て此四字と記せり云
と也世人寄合沢の者の云ふ事を筆に者て非例なる者なり

扁額軌範二篇下終